

甲奴郷土史だより

第17号
2020年9月

甲奴郷土史研究会発行

郷土誌「げいびグラフ」から《ああ、懐かしの甲奴・・・》

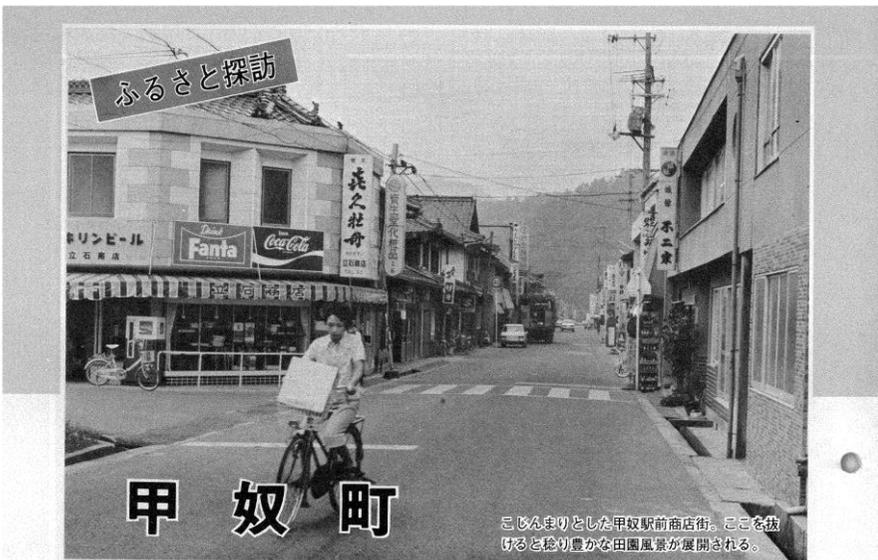
（株）菁文社さんが発行されていた郷土誌「げいびグラフ」。昭和四九（一九七四）年九月に第一号が発刊され、残念ながら平成二七（二〇一五）年四月第一三〇号を以て休刊となっております。

内容は三次市内はもとより、庄原市、府中市、安芸高田市、神石郡と近隣の『その時気になるニュース』や『地元で頑張っておられる人・団体』をズームアップしたり、懐かしい記事や写真を織り交ぜながら、読む人を飽きさせない構成でした。

今回より（株）菁文社さんより、甲奴町関連の資料を掲載させていただく了承を受けました。懐かしい、あの日・あの時の甲奴をご紹介します。



【ふるさと探訪 甲奴町】 昭和五十（一九七五）年第七号 （株）菁文社「げいびグラフ」より



こじんまりとした甲奴駅前商店街。ここを抜けるど切り豊かな田園風景が展開される。

黄色く色ついた稲穂が、重そうに頭をたれて、初秋の風に身をまかせていた。もう刈取りを待つばかりの田園が、行く先々で目の前に広がってくる。

甲奴郡甲奴町は、のんびりとした純農村地帯。現在もこれといった工場もなく、わずかに国鉄塩塚線甲奴駅附近に、新しい商店がこじんまりと連なっているのが印象的だった。昭和30年の町村合併でこの町が誕生し、その後家並みを整備してきた商店街だということから、町にまだなじんでいないのようになってくる。

「甲奴町で有名なものといえば、小童の祇園さんですか——」問う人ごとに、返ってくる言葉はこれだった。小童は甲奴町内の南端、上下町矢野に隣接する旧広定村内にある。甲奴町としての歴史は浅いけれども、神話と伝説に富んだ、この町自慢の村落だ——と、ある古老はいう。ここ須佐神社は、出雲で八岐大蛇を退治した須佐男命を祭神とし、有史以前の創建といわれる古い社で

ある。もっぱら地元の人はこの神社を「小童の祇園さん」と呼び親しんでおり、須佐神社というより、こちらの呼び名の方が知名度が高い。というのも、毎年暮しも本格的な7月の第3日曜日に、この神社の祭礼である祇園祭りが、地元はもとより近郷近在からの参拝者数千を包容して賑やかに催されるからである。

上下町矢野から約100人の供奉で繰り出す神儀で、約1200年の歴史をもつ祇園祭りが始まると、いつもは静かなこの村里が、エネルギーあふれる人波で埋めつくされてしまう。鐘と太鼓・笛の優雅な行列、それに続く日本一大きな御輿の渡御、そして子供が主役の勇壮な太鼓打の音の響き、祭りは一層の華やかさを増し、暑さも忘れて人々は祭りに酔いしれるという。

盆のかわりに、祇園祭りに都会から帰省する若者も多いという。昔の祇園祭りといえば、この日ばかりは若者も公然と酒を呑み、御馳走をたらふく食べ、愉快に遊ぶ楽しみがあったが、現代の若者にとっては、さして大きな楽しみとはいえない。それでも絶えることなく継承され、童心にかえて楽しむ祭りの魅力とは、何なのだろうか。人影のない小童の古い家並みに添って歩きながら、ふとこんなことを思った。



- ① 期待作物のピーマン栽培。大阪方面に出荷される。
- ② 須佐神社本殿。備北五郡の総鎮守として荘厳なたつづみを見ている。
- ③ 祇園祭りの祭礼。1月7日に行なわれ、東宮神社に上つらえ的に弓を射て悪魔払いをし、1年間の無病息災、五穀豊穡を祈る。
- ④ 矢野神儀の彫形。「橋公父子の別れ」「義士の討入り」など、歴史にちなんだ人形を彫形にのせておび歩く。祇園祭りの神儀。
- ⑤ 祇園祭りの土蔵は、昔ながらの祇園船と様。門前町は之等の露店で賑わう。
- ⑥ ひやきの神樹。須佐神社境内にあり、樹齢1000年以上の巨樹。この樹の穴洞には大入100人が入れるという。頼吉塚が参拝し、献祭している。
- ⑦ 白藤。当地龍山城城主長綱時が、尼子討伐の戦勝折懸に植えたと伝えられ、須佐神社境内にある。白い花が散る様は雪のように美しい。

【町名アラカルト】昭和55年第22号

(株)青文社『げいびグラフ』より




町章

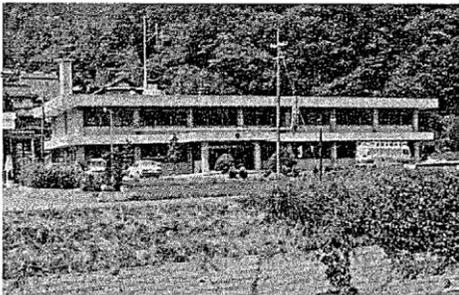
この町章は、甲奴町の甲奴をカタカナ字「コーヌ」に図案化したもので、円によって町民の和と団結を表現したものである。

昭和50年4月制定

甲奴郡 甲奴町

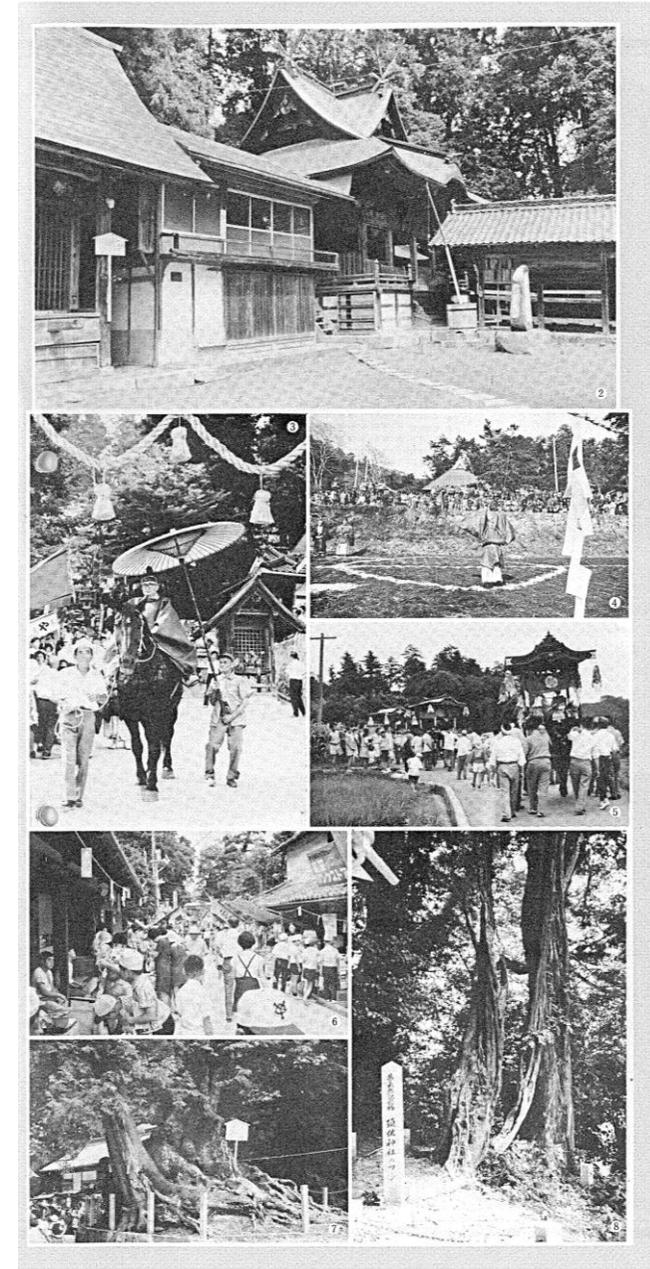
続日本記に、奈良時代、明天皇の「利鎭2年(709)冬10月庚寅備後国芦田郡甲奴村は……」とあり、平安時代(794~1192)中期の漢和辞書「倭名抄」には、甲奴郡に矢野、甲奴、田総の三郷ありと記載され、吉野、有田、安田は甲奴村に属していたとの説もある。往古は「甲努」、文政年間には「甲怒」の文字を用いたが、倭名抄には「甲奴」を使用している。何れにしても千二百有余年前から「甲奴」の名称は存在していたと思われる。

戦後町村合併促進法に基づき、昭和30年に



甲奴町役場

旧甲奴郡甲奴村と双三郡吉舎町に合併した旧甲奴郡上川村大字知和、安田、太郎丸の一部を除く旧上川村をもって甲奴町を設け、更に33年世羅郡広定村と合併、同36年大字宇賀の一部が吉舎町に分離して現在の甲奴町となる。



モノクロの写真。今から四五年前の甲奴町です。

現在のカーター通りを、さっそうと自転車で走る女性。買い物帰りでしょうか。こじんまりとした商店街とありますが、当時の賑わいや、今は無くなってしまった昔なじみの商店も写真に収められています。

次は須佐神社ですね。的弓祭の様子や夏の祇園祭の様子のように。町内外からたくさんの人々が参られて、甲奴の二大神事は本当に賑やかだったことがわかります。

県天然記念物のフジ、武塔神社のケヤキでしょうか。半世紀たった今でも、御神木としての役割を、きちんと果たしています。

『半世紀前の甲奴』を今懐かしく、また初めて見る私たち。これも『記録』として残してくださったからです。



空の旅

甲奴町

市街地を中心に、画面いっぱいに展開する田園地帯は、備後のほぼ中央部、甲奴町の中心地である。昔「加不乃」で呼ばれた郷名はのち「甲奴」となり、現在に及んでおるが、もともと農業が主産業であるこの地も、専業農家は減少して兼業農家が増えているのは何処も同じ。画面中央を県道に接して斜に走る国鉄福塩線が、府中・福山方面への現金収入の道となっている。

写真中央上部に造成地が見えるのが新しい甲奴小学校で鉄筋コンクリート建て、その麓の赤瓦屋根が見えるのが旧校舎である。そこから手前へ並んで中学校・町役場・中央公民館・青年研修所がある。

何かを求めて止まぬ町民性は、市街地の軒先を切り、道を拡げ、こじんまりとした商店街を出現させた。この商店街にはまだまだ家の建ち並ぶことが予見される。

商店街を右に走る県道は上下町に至り、左に走る道を行けば小童の紙園さんと有名な須佐神社がある。中央を縦に蛇行する道を行けば宇賀峠を越えて吉舎町に至る。



高度 3,000フィート

【空の旅 甲奴町】

昭和五十一（一九七六）年第十号 榊書文社「げいびグラフィ」より

前頁の【空の旅 甲奴町】の解説文が小さいので、大きくしてみます。その当時の甲奴の町の様子を、どのように紹介してあるのでしょうか。

市街地を中心に、画面いっぱいに展開する田園地帯は、備後のほぼ中央部、甲奴町の中心地である。昔「加不乃」で呼ばれた郷名はのち「甲奴」となり、現在に及んでおるが、もともと農業が主産業であるこの地も、専業農家は減少して兼業農家が増えているのは何処も同じ——。画面中央を県道に接して斜に走る国鉄福塩線が、府中・福山方面への現金収入の道となっている。

写真中央上部に造成地が見えるのが新しい甲奴小学校で鉄筋コンクリート建て、その麓の赤瓦屋根が見えるのが旧校舎である。そこから手前へ並んで中学校・町役場・中央公民館・青年研修所がある。

何かを求めて止まぬ町民性は、市街地の軒先を切り、道を拡げ、こじんまりとした商店街を出現させた。この商店街にはまだまだ家の建ち並ぶことが予見される。

商店街を右に走る県道は上下町に至り、左に走る道を行けば小童の祇園さんで有名な須佐神社がある。中央を縦に蛇行する道を行けば宇賀峠を越えて吉舎町に至る。

現在の場所に甲奴小学校が建設されていた頃の写真。きれいに整地された田んぼと、真つすぐ伸びる県道が、とても特徴的。ちようど四十年前の、本郷・西野地区の様子です。



原始時代の出土品

カーターセンターエントランスホールに展示してある土器などの出土品は、全部甲奴町内から出土したものです。七月に行われた、甲奴中学校一年生を対象とした『甲奴町史跡めぐり』でも紹介させていただきました。

その展示してある出土品の中で一番目に付くのは、脚の付いた長頸壺ではないでしょうか。これは、小童の埵地区にあった『埵川西遺跡』から出土した、弥生時代中期後半の土器です。

『埵川西遺跡』は、平成元（一九八九）年三月に、小童・埵地区を南から北に流れ、小童川に合流する埵川の西側の畑を田んぼにするための県営圃場整備事業に伴う試し掘り調査によって確認されました。

平成二（一九九〇）年六月から一カ月、広島県埋蔵文化財調査センターの是光課長（当時）の指導により発掘調査が行われ、南北に走る幅三〇～四〇cm、深さ十～一五cm、長さ三・二五mの溝状の遺構や、柱穴と思われるものが大小あわせて一五あり、その大きさは穴の上面で二〇～五〇cm、深さ一五～三〇cmのものが多く発掘されました。この柱穴は、耕土の流失を止めるための柵に使用した杭の柱穴ではな

いかと考えられます。

建物の存在などを確認することができず、遺跡の性格がなかなか明瞭にならない状況で、発掘作業が終わりに近づいた時、調査地区の隅の部分から、土器片がかなりの量まとまって発見されました。出土した土器片を、広島県の埋蔵文化財調査センターへ送り、接合復元してもらったところ、約二千年前の弥生時代中期後半の壺形土器、甕形土器、高坏形土器などが立派に復元されました。

これらの土器の特徴として、

* 凹線文の多様化

* 甕内面の△フケズリの始まり

* 算盤玉状の体部をもつ無頸壺

* 椀状の坏部をもつ高坏の存在と

円形浮文

などが挙げられ、その特徴から広島県の東部を流れる芦田川水系でよく見られる『芦田川系』のものであると考えられます。



椀状の高坏



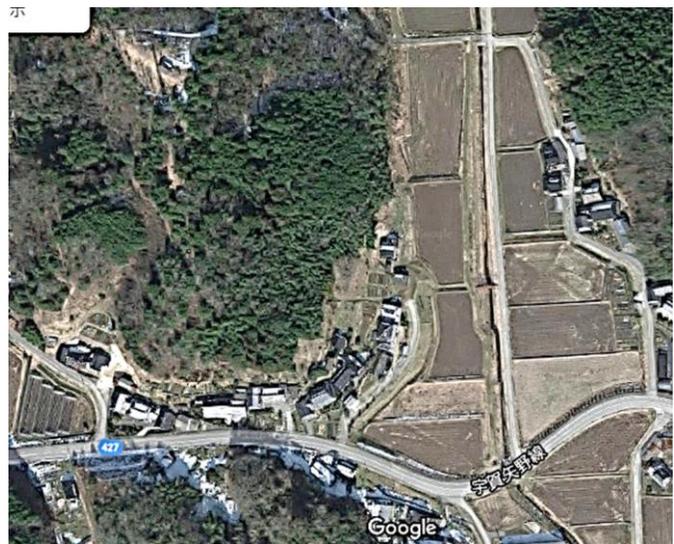
円形浮文

長頸壺の口頸部は、もともと筒状をしており、上方へ伸びていたものと考えられますが、人為的な打欠きが見られ欠損しています。穿孔部を下に向けて、中に乳幼児などを入れた棺（土器棺）として利用されていた可能性が考えられ、一緒に出土した高坏が、この棺の蓋になっていたと思われる。

一般的な弥生土器の特徴としては、縄文土器の流れをくむ素焼きのもので、縄文土器よりきめが細かく、薄くて堅いことや、地域によって形の違いがあります。また、用途に応じて、煮炊きに使う甕、貯蔵用の壺、ものを盛付ける・供える高坏（坏）に分けられ、それらがセットで用いられていました。これらは米作りを中心とした生活への変化を示しています。



脚付き長頸壺



現在の埴川西遺跡のあった埴地区

この他の特徴として、櫛描文が施されていることです。櫛描文とは、櫛の歯で付けたような、平行する直線または曲線からなる文様のことで、土器の模様として施されます。櫛目文とも言われています。



櫛描文



展示してある長頸壺の櫛描文

広島県内の弥生土器は、大きく3つに分かれています。備北・芸北は、出雲地方（特に石見）に、備後南部（備南）は吉備地方（特に備中）、芸南はその西の地方の土器圏に属していました。

影響のあった備後南部は、弥生時代中期後半ごろから後期にかけて【神谷川式】という土器文化が生まれ、吉備の影響を受けていました。吉備地域に似た高坏形土器、肩の張った鉢形土器や壺形土器、高坏形土器の坏部の形をした大小の鉢形土器、中・短頸の壺形土器などがあり、前半には備中南部などの要素を色濃く示しています。

後期後半には、高坏形土器の製作技術、頸部の刻目文や口縁部を疑似凹線文で飾る壺形土器、胴が伸び気味の甕形土器など、吉備の要素は失われて、独自色を強めています。

これらの土器のほか、縦三二cm、横一八cmの長方形の砂岩で出来た砥石と、磨製石斧と呼ばれる、十cmから二十cm大の平らな石のまわりを小さく打ち割り、叩いて形を整えてから、砥石で磨いて作った斧がそれぞれ一個ずつ出土しました。

これらの遺物の出土状況から推定すると、『埴川西遺跡』の上部の山の斜面に住居群があり、そこで使われていたものが洪水などにより流されて堆積したものであると考えられています。

佐賀県の吉野ケ里遺跡などとほぼ同時期の遺跡が、甲奴町にもあったのです。

【参考資料・写真 出典】

- ・広島県立歴史民俗資料館『西と東の弥生土器 卑弥呼の時代の安芸・備後』
- ・安城市『土器の文様のはなし』
- ・宮崎県埋蔵文化財センター
- ・愛媛県埋蔵文化財センター
- ・甲奴町教育委員会『続ふるさとこぼれ話』『埴川西遺跡発掘調査報告書』
- ・庄原市帝釈博物館展示施設 時遊館

郷土の年中行事と方言（九月）

皆さんはこの冊子を覚えていらつしやいますか。昭和六十（一九八五）年に、甲奴町教育委員会と甲奴町誌編纂委員会から発行された『郷土の年中行事と方言』という冊子です。

写真を見て、「そうそうあった、あった」と覚えておられる方もいらつしやると思います。

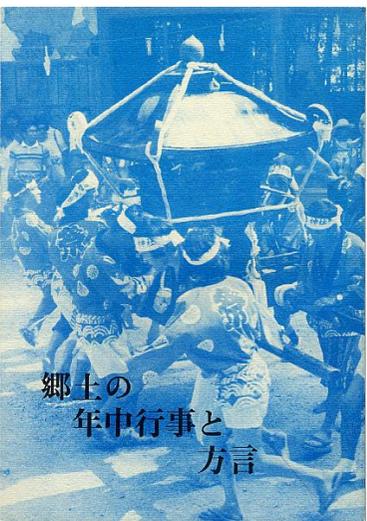
内容は、

* 月別の行事とその考察

* 人の一生に関わる行事

* 方言について

と大きく3つに分けて紹介してあります。今回は、この中から『九月の行事』についてご紹介します。



九月は、●初旬「二百十日」について

●二十日頃「秋の彼岸」について

●旧十五日「仲秋」について書いてあります。

この中でおもしろいと思ったのは、●二十日頃「秋の彼岸」についてです。

炎暑が去り、秋の草花が咲き始めてさわやかな季節を迎える頃、春の彼岸と同じように先祖の供養と墓参が行われる。中日は「秋分の日」として国民の祝日に定められている。近年は稲作が一月以上もはやくなったために早生種などは彼岸を過ぎると早速刈り始めるところもある。

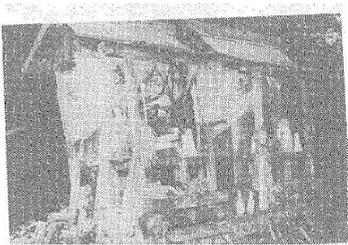
梶田では大正末期に祀られた八十八カ所巡りが最近有志によって復活し、大師堂の清掃や遍路道の案内標識をはじめ、信者への接待なども見られる。往時の彼岸行事を偲ばせて何となく心温まるものがある。

八十八カ所巡りと言えば、四国。白衣に遍路笠。金剛杖をつきながら、数カ月かけて歩いて回る「遍路修行」。この修行をしている時は、常にお大師さま（弘法大師）と共にいる・同行二人だと言われています。

この八十八カ所巡りを、甲奴の人々も明治末期から参詣していたようですが、年を重ねれば参詣も困難になるので、梶田へお大師さまをお祀りすれば、誰でもいつまでもお詣りすることが出来る・・・と思いついた、梶田に住んでいたお二人の方が発起して完成させたそうです。

四十年前に行われた甲奴町体育協会のウォーキング行事で、梶田の八十八カ所の一部を歩いて回ったという話を聞きました。梶田・戸下にある休み堂を出発し、粟島神社などを巡りながら、現在は誰も行く人はいないのかもしれませんが、梶田駅南方の

山の中にある急な上りの道を上ると、『足』の健康をお祀りする祠・足王さんがあり、大きなわらじやたくさんの方のわらじがお供えしてあったそうです。



足王さん、手王さん
梶田 一ノ木



大正末期に始まり、三十五年前までは梶田の八十八カ所巡りが盛んに行われていた。そして、地域の方も盛り上げようと清掃や接待をしていた……。今は廃れてしまったことに、少し寂しい思いがしました。

今年の三月に行われるはずだった『健康づくりウォーキング』で、梶田のお大師さまや粟島神社を巡るコースを歩く予定でしたが、新型コロナウイルスのため中止となりました。新型コロナウイルスは、これからどうなるのかわからない状況ではありますが、健康ウォーキングが実施される時が来れば、ぜひともこのコースを歩いて、往時を偲んでみたいなあと思います。

【参考資料・写真 出典】

- ・ 甲奴町教育委員会・甲奴町郷土誌編纂委員会『郷土の年中行事と方言』
- ・ 甲奴町郷土誌編さん委員会『甲奴町郷土誌 第一集 甲奴地区編』
- ・ (一社) 四国八十八カ所霊場会ホームページ『四国遠路について』

事務局より

- ・ 会員募集中です。ご紹介ください。
- ・ 会の運営や研修内容について、ご意見やご質問何でも結構ですのでお聞かせください。
- ・ 「甲奴郷土史だより」にどんなことでも良いから、ご寄稿ください。
- ・ 古い写真や資料等を「甲奴郷土史だより」へ掲載していきます。
- ・ 出品物につきましては、責任を持って返却しますので、ご連絡をお願いいたします。

連絡先 鶴本 節子（カーターセンター）

〇八四七―六七―三五三五

